バイカル湖を旅して

大　賀　二　郎*

はじめに

戦時のことである。

どこへ連れて行かれるのだろう。何日も続くシベリア鉄道の旅である。やっととある駅で降ろされる。

そこに海があった。

戦争抑留者たちは，走って行って水を浴びた。この海の向こうに故国日本がある。やっと帰る日が来たのだ。人々は小踊りして喜んだ。

だが，その水は塩辛くなかった。

それは，バイカル湖であった。

戦後，国土がまだ復興途上にある頃，初めてソ連映画が封切られた。広大なシベリアの大地と苛酷な自然に生きる民族の姿が，当時としては珍しくカラーで描かれていた。バイカル湖がそのとき紹介された。鮮烈な印象を受けた。

辺境の地に，太古の静寂を湛える湖。湖上を渡って行く船がある。人々の口から自然とうたが流れる。「バイカル湖の唄」である。見事なハーモニーであった。荘重な調べはいつまでも漣のなかに漂っていた。

映画では湖の一場面が出ただけであった。神秘な水中や湖岸を取り囲む森林帯には，どのような生物が生息しているのだろうか。長い間，その思いが心から離れなかった。

シベリアへ

1988年8月，長年の願いであったバイカル湖を訪れることになった。国際空港としてはさびしい新潟空港を午後の長い陽ざしのなかに飛び立つ。ソ連のＴＵ－154型機である。逆光に輝く日本海を，1時間もすると陸地に入る。シホテアリニ山脈である。人跡未踏のタイガが続く。

新潟を立って2時間あまり。やがて広大なアムール河が，鈍重な輝きをみせる。それにそって都市がある。ハバロフスクである。古風な町であった。広々として，街路樹が眩しかった。日本を立つときは盛夏であったが，ここではもう秋がいっぱいであった。

アムール河畔に公園がある。見晴し台に立つと，大河が悠々と流れている。向う岸は中国である。公園内には，どういうわけか，大きな鯨の骨格標本が置かれていた。

郊外は草原である。シベリアの大地が，かすかに呼吸していた。その呼吸音が聞こえてくるような静けさであった。

バイカル湖へ

バイカル湖へは，イルクーツクから入ることになっているが，現在同空港は拡張工事中のためジェット機の発着ができない。ウランウデかブラーツクまで行って，そこからプロペラ機に乗り替えなければならない。

イルクーツクは，深い霧のなかにあった。そのため便は数時間遅れた。同市は古い時代の木造家屋が今なお軒を連らねる。重厚で歴史のある街である。街の中央に清いアンカラ川がごうごうと流れる。バイカル湖からの水である。

イルクーツクから湖畔の村リスビアンカまでは，アンカラ川を高速艇で遡るか，川にそってバスで行くかいずれかである。どちらも1時間あまり。私たちはバスを利用した。樹林と湿原の続く道である。

リスビアンカに着いたのは，夜も9時になっていた。しかし，まだ暮れてはいなかった。高台にあるホテルバイカルからは，荘厳なバイカル湖の落日が眺められた。

左右の山脈はシルエットになっている。中央の湖面にわずかに光が漂っていた。水平線の先には，何も見えるものはなかった。

ゆたかなるバイカル

聖なるバイカル

祈りにも似た気持であった。感動的な出会いであった。この日をどれだけ待ったことであろう。

ホテルバイカルは数年前に建築された，55室程の中規模だが湖畔で唯一のホテルである。どの室からでも眼下に湖を一望することができる。

このホテルを基地として付近の散策に出かけることになった。湖岸までは原野や林のなかを抜けて10分あまり。水中に手を浸すとすごく冷たい。夏期水面温度は11℃前

＊　神戸市長田区片山町1丁目24－3

後といわれている。長寿の願いをこめて手で掬って飲んだ。そして記念のために瓶にも入れた。

水中を覗くとすい込まれそうだ。斜めに急速に落ちこんでいる。岩には藻のようなものがゆれている。どこまでも澄み切っている。人の心の奥まで透かすようであった。

湖の水が流れ出るアンカラ川の河口あたりに出ると，中程にわずかに波が砕けるところがある。シャーマンの岩と呼ぶ岩礁である。人ひとりがやっと立てる程度であるが，水中では深いところから立ち上っていて，小山のような巨岩だそうだ。伝説を秘める岩である。漁師たちはここを通るときコインを投げて安全を祈るという。

リスビアンカ村は丸太造りの家が殆んど。木彫りの出窓には花鉢などが置かれている。湿原の中の集落もある。清流がそのなかを縦横に走る。山裾には小さなギリシャ正教の教会があった。清楚な花がこぼれるばかりであった。村の道路はまだ地肌がそのまま。やはり原始の地である。

湖畔にはほんのわずかばかりビーチといった感じの砂浜もある。水着姿の若い男女が，それも数人寝転んで淡い光を体いっぱい浴びていた。水中にはとても入ることはできないが。スーパーと売店が数軒。日用品，野菜，みやげ物が並んでいるが，商品の種類や量は至って少ない。

ここには船付場があって，観光用の高速艇が出ている。アンカラ川の河口あたりから南部の岩壁地帯を廻るのが通常コースとなっている。船上からは湖岸を走る旧シベリア鉄道の橋やトンネルも遠望できる。むかしはこの線で北上し，中程から冬期結氷のときに湖上に線路を布設し，西岸と連絡したという。現在は特定区間の貨物輸送に利用されている。

一部地点に造船所もある。沖合に船舶が航行しているのを見ると，ここはやはり海である。

バイカル湖博物館

ホテルバイカルから針葉樹林のなかを下ると，湖の展望のよいところに出る。そこにソビエト科学アカデミー・バイカル湖沼学研究所バイカル湖博物館がある。3階建の古風な建物である。一階の二つの展示室には，湖沼学，気象学，地質学，エネルギー資源，生物学等の視点からの展示が行われている。

展示物には次のようなものがあった。模型としては，バイカル湖の鳥瞰，断面，湖底探査船，イルクーツク発電所の原理などがある。標本としては，クマ，ヤマネコをはじめ各種のけつ歯類，クマタカなどの鳥類，チョウザメ，オームリ，カマスなどの魚類，淡水カイメンなどの剝製，乾燥標本またはアルコール漬，マンモス，恐竜などの部分化石などがある。

そして館の重点研究テーマとしては，バイカルアザラシをはじめとする固有種の研究，魚類，甲殻類などの深所生息生物の研究，バイカル湖とアフリカタンザニーカ湖との比較研究などに，ウエイトがおかれているように見受けられた。

バイカル湖の見学には，博物館であらかじめ概念を得ることが必要と思われる。入館には，次のような手続きがいる。

1　入館は，原則として団体で，事前の許可が必要。入館時間が指定される。
2　見学は，専門官の説明を受けることになる。自由見学はできない。
3　写真撮影は，フラッシュ使用を含めて許されている。
4　入館は無料である。

館には，パンフレットなどの資料の備付はない。。館の門前に売店があるがソビエトの一般的な案内書で，バイカル湖だけの専門書はまだ作られていない。

私は，個人として館長格の人に入館をお願いしてみた。大きなデスクの前で研究分野などをたずねられた。体格のがっしりした女性で，英語のほか日本語も一部わかる人であった。きさくにO.Kがでて，ていねいに館内を案内していただいた。

以下，バイカル湖の自然，生物などの主要なデータについては，主として博物館資料によった。

バイカル湖の自然

バイカル湖は，2500万年程前に大地溝帯にそって誕生したといわれている。ユーラシア大陸最大の淡水湖である。ほぼシベリアの中央部に位置する。北部は永久凍土，ステップ，南部はモンゴルの乾燥地帯が迫っている。

このあたりの気候は不安定で，突然バイカル名物の突風が吹く。山から南へ吹きつける風はゴムトウクと呼ばれ，他にサルマ，バルドジンなど嵐に名前がつけられている。

10月から3月頃までは結氷し，自動車の往来もできる。湖の面積31,500平方キロメートル，湖岸線2,000キロメートル，長さ631キロメートル，最大幅79キロメートル，せまいところで25キロメートル，平均40キロメートル。

湖岸は，山岳，草原およびタイガと呼ばれる針葉樹海で囲まれ，そのなかに深い渓谷や地溝であるためか約35

の温泉もある。

このような複雑な地形のため湖岩は変化に富み，巨岩や入江があり，北部には22の島が散在する。そのなかのオルボン島には漁村があり，オームリ漁の基地となっている。

この湖が世界に誇るもののひとつは，1620メートルという深度である。平均深度も400メートルといわれ，それは海洋の場合でも深海域である。水量は，その面積と深度からしてきわめて大きく，北米五大湖の全水量をはるかにしのぐという。

いまひとつは透明度である。水面下40メートルの円板を識別できるという。この透明度については，長い間，謎であった。近年の研究で，湖底に生息する淡水カイメンの一種の作用にもよるらしい。カイメンが水中の汚染物質を体内に吸収し，水を清浄に保っているという。だから逆に，このカイメンが何かの原因によって死滅することにでもなれば，汚染物質が水中に還元され，大変な事態が予想される。

ともあれ，深度，淡水量および透明度は，いずれも世界最大である。

バイカル湖の生物

バイカル湖とその周辺の生物分布は，きわめて多様である。1800種の動植物が分布し，その¾は固有種とみられている。

理由のひとつは，湖の生成が第三紀の古い時代に起こったこと。そして，いまひとつは，環境がきわめて変化に富んでいることである。

特徴的なものとして，哺乳類では，淡水固有種バイカルアザラシが生息している。その先祖は海産のものであったとみられている。

湖岸の森林地帯には，アカグマ，シベリアオオジカ，ヘラジカ，イノシシ，キツネ，タヌキ，ヤマネコ，シロウサギ，シマリスなどが生息している。北部草原地帯にはトナカイ，湖の浸水デルタにはマスクラットが生息している。

東部沿岸地区バルグジン山脈には，黒テンなどの禁猟区がある。黒テンは1匹5万円もするといわれ，コートになると軽く1000万円になるという。湖の周辺にはミンク飼育が行われ，ダークブラウンミンクが主である。

鳥類では，400種類ほどがこの地方で姿をみるという。このうちオオライチョウ，クロライチョウ，エゾライチョウ，ヤマドリ，カモ，ガンなどは猟の対象となり，生態がよく知られている。

爬虫類，両生類はよくわかっていない。魚類では，56種が湖で確認されている。オームリ，ウスリーシロザケ，ヒメマスなど冷水性のマス科のものの個体数が多い。大型のものとしては，チョウザメ，タイタンなどが体重数10キログラムを越える。その他，イトウ，カマス，スズキ，カワメンタイ，ナマズなどの種がおり，変化に富んでいる。漁業の主な対象はオームリで，60メートルの深さまで網が入れられる。

昆虫類では，ウスリーカミキリ，アポロチョウなどの種類が知られている。

植物では，タイガを構成するものとして，モミ，トウヒ，トドマツ，カラマツ，シベリアスギ，シラカバ，ハクヨウ，ハンノキなどが主なものである。

草本としては，くわしい資料が見つからなかった。リスビアンカ村周辺をトレッキングした限りにおいて，その周辺の原野，湿原には，ヤナギラン，レイジンソウ，キジムシロ，ミツガシワ，バイケイソウ，フウロウ，ケマンソウ，サクラソウ，アザミ，タデ，ワラビ，ヨモギなどが目についた。基調的には，日本の山野のものとあまり変わらない。種類も多くはない。

村落周辺には，ポピー，マーガレット，クローバーなど栽培植物が逸出していた。

バイカル湖の環境保護

バイカル湖とその周辺は，今なお秘境である。大自然のたぐいまれな景観と動植物の宝庫である。

近年，水産，林業，水力発電，科学などの生産地として，部分的に開発が進んでいる。湖岸の山岳には，ボーキサイト，金，黒鉛などの埋蔵資源もある。

このような背景から，湖の汚染が何よりも心配される。ソ連政府はバイカル湖と周辺の自然環境保持について，きびしい施策を打ち出している。つぎのような立法もされている。

1　すべての工場は，化学的，機械的な浄化設備を義務づける。
2　有機物の発生を防止するため，湖や流入河川の腐木を引き上げる。
3　湖岸一定範囲の伐木を禁止する。
4　漁獲は一定の制限のもとで行う。
5　動植物の保護と土壌の保全を図る。
6　研究，監視のための委員会を構成する。
7　積雪，空気，汚染等の調査，更には火災の発見，消火活動など，航空機も協力して行う。

おわりに

バイカル湖は，北は北極圏のツンドラ地帯に，南はモンゴルのステップ地帯に近い。第三紀の地殻変動のときから，満々と水を湛え，その淡水量は全世界の¼といわれる。しかも透明度は世界に類をみない。湖と周辺には，

多様な動植物が生息し，その¾は固有種という。世界最深の内部には，まだ多くの謎が秘められているという。

この湖に，ほんの垣間見るだけの旅をした。聖地におもむく気持ちであった。

バイカル湖の夏は短い。湖畔の野の草は一斉に開花し，同じときに，もう結実を始めているものもあった。森林も，原野も，集落も，あわただしく装っていた。

湖は一日の間でも表情を刻々と変える。陽が拡がっているかと思えば，どこからともなく驟雨が走る。鏡のような水面に，不意に漣が立つこともある。ときとして嵐が荒れ狂い，ときとして白一色の濃霧に閉ざされる。湖はさまざまな貌をもっている。

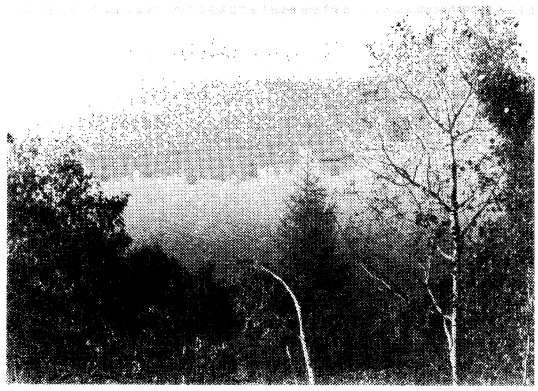
だが，その悠久の姿は変わらない。寡黙で，なにも語ろうとはしない。原始のままの静けさである。

参 考 文 献

バイカル湖博物館　1988　展示資料

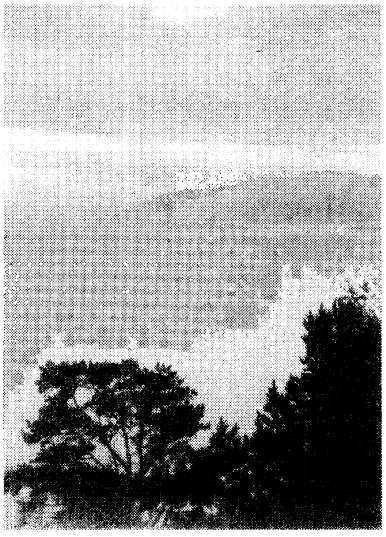
アエロフロート（ソビエト航空）1988　バイカル湖

高橋栄一　ほか　1979　世界の国（ソビエト連邦）

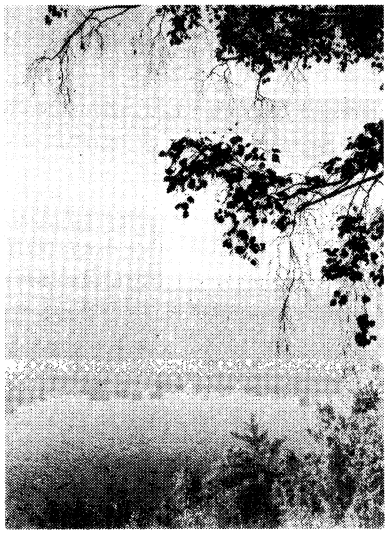


バイカル湖岸は森林が急迫する

バイカル湖とソ連の少女
（盛夏でもオーバーを着ている）



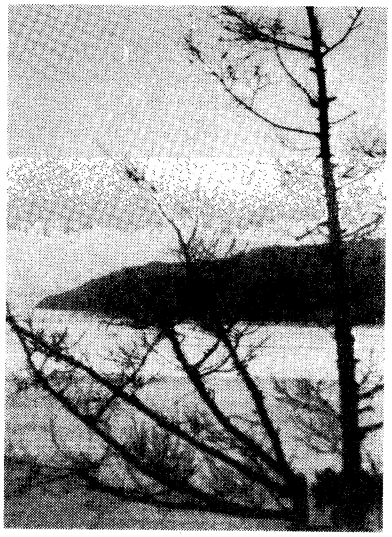
バイカル湖南部の一般風景



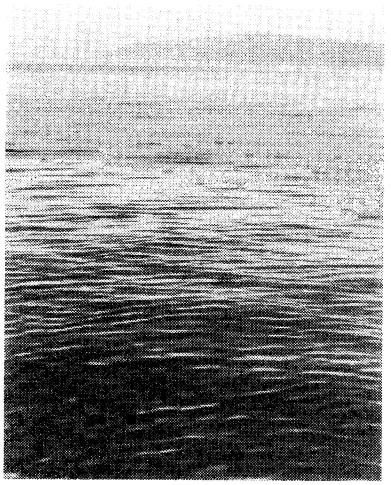
北方を望めば、水平線のほかなにも見えない

湖上は船舶が絶えず航行する

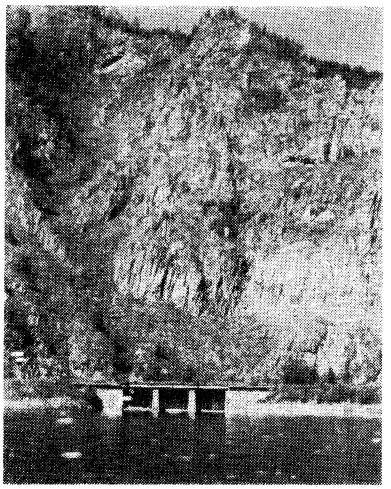
荘厳なバイカル湖の落日



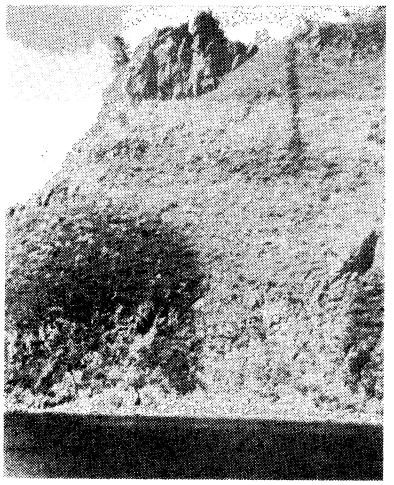
バイカル湖上の月（月が出ても意外と明るい）



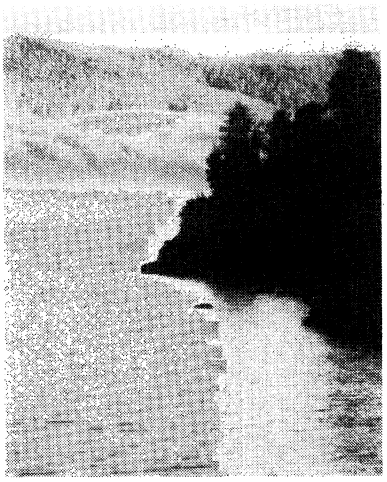
水中はどこまでも澄んでいるが暗い



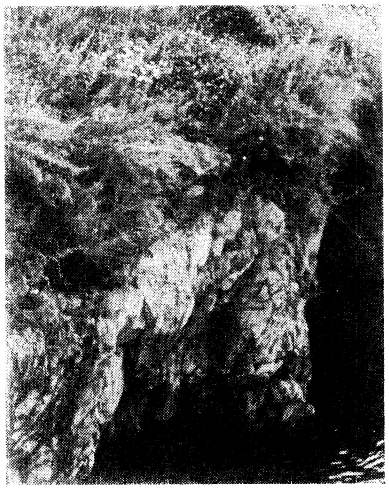
旧シベリア鉄道は湖岸に
そって走る（現在は貨物輸送）



湖の南東はこのような断崖が多い



天気は刻々と変る。すでに霧が立ち始めた

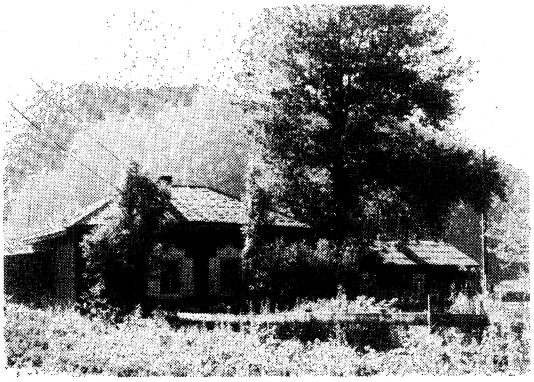


湖にオーバーハングする野草の群れ

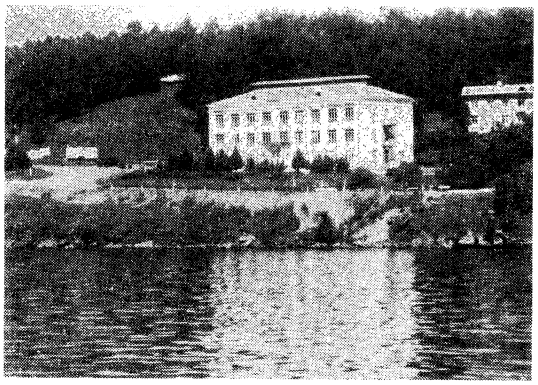
湖周辺の湿原の一般風景

湖畔を彩る野草の群落

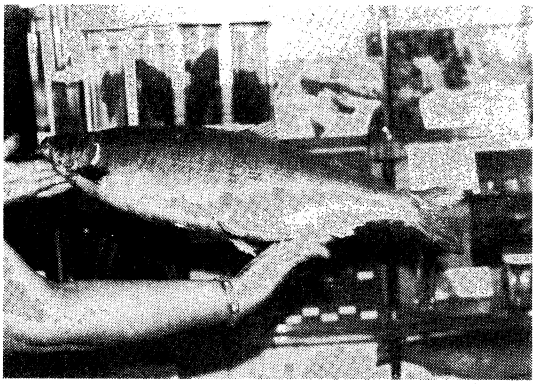
野草の一種



湖畔の一般的民家



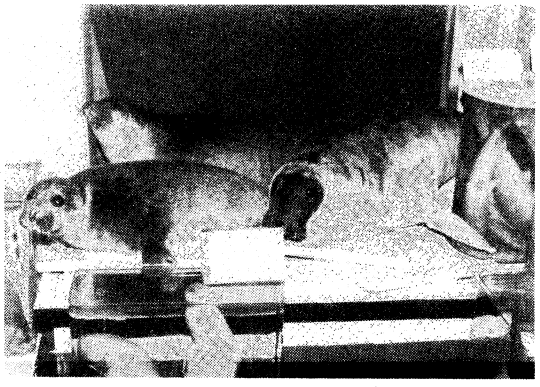
バイカル湖博物館



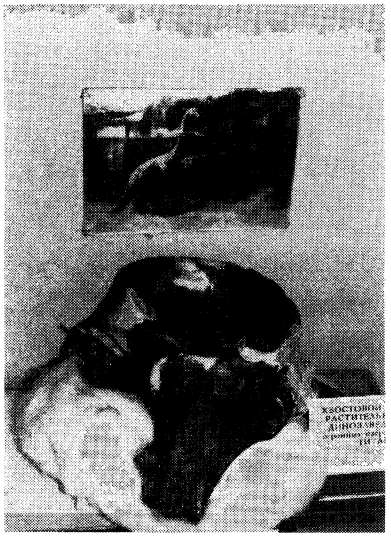
食用魚オームリの標本

博物館展示の一部

湖水清浄の役割をしている淡水カイメンの一種



バイカルアザラシの標本



付近で発見された恐竜の化石の一部